

platform/light

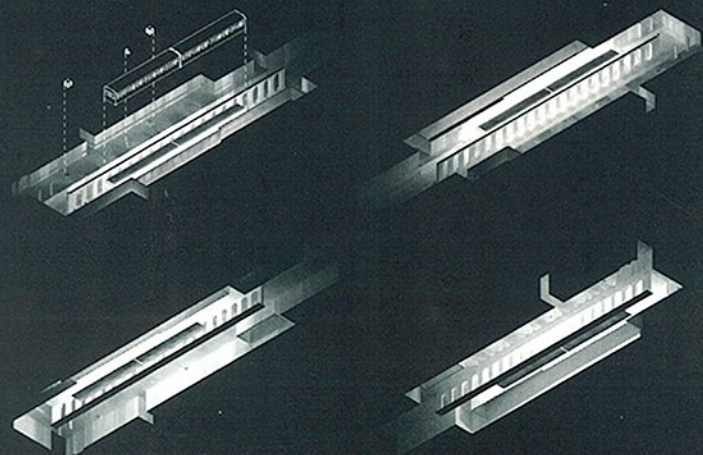
■keyword: 記憶 × 歴史 × アート

■物語: 会社帰り、ギャラリーに転用されたという新橋駅・幻のホームをふと訪れた。展示物を見ながらホームを進むと、徐々に違和感のようなものが込み上げてきた。目を凝らすと、床や壁の実際には光が当たっていない場所が明るく、影がないはずの場所に影ができていくことに気付く。すると、突如としてがらんとするのはホームの上にかつての賑わいが立ち現れた。電車が到着し、雑踏がホームになだれ込む... はっと我に返り、酔いにも似たふわふわとした浮遊感の中、置かれた椅子に腰掛けた。

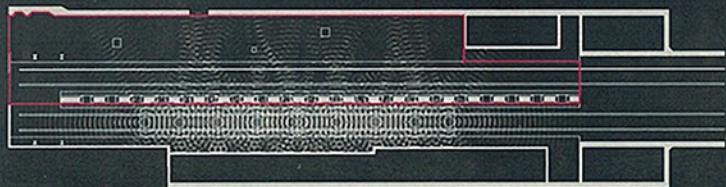


▲開業当時の1000形車両(2両編成)

■設計主旨: 開業当時の1000形車両を対面のホームに仮想の光源として設定し、ホームの壁、床、天井に投影される光の濃淡を着色していく。訪問者は仮想の光に包まれ、かつてのホームの賑わいに酔い痴れる。



▲仮想の光源による光の濃淡(=塗装箇所)のシミュレーション



▲平面図(S=1/750) 同心円の中心が光源の設定位置(増設された壁は撤去)



かつての賑わいが眼前に立ち現れるかのような陶酔感に浸る
タイル壁や白線などはそのまま、既存ホームの空間の質を活かしたギャラリー



MTR-B-0393